

令和6年度第2回富山県総合教育会議 議事録

1 日 時 令和6年7月22日(月) 13:00～14:47

2 場 所 県庁4階大会議室

3 出席者 富山県知事 新田 八朗
富山県教育委員会
教育長 廣島 伸一
委 員 坪池 宏
委 員 村上 美也子
委 員 大西 ゆかり
委 員 黒田 卓
委 員 牧田 和樹

学識経験者 青木 栄一(東北大学大学院教育学研究科教授)

有識者 杉野 岳(株式会社スギノマシン代表取締役副社長)

4 事務局出席者 経営管理部長 南里 明日香
理事・経営管理部次長 坂林 根則
理事・教育次長 水落 仁
教育次長・教育みらい室長 中崎 健志
教育次長 小杉 健
参事・教育企画課長 板倉 由美子
学術振興課長 水上 優
県立高校改革推進課長 丸田 祐一
教育みらい室課長 嶋谷 克司
他関係課職員数名

5 議 事

- (1) 県立高校における教育振興について
- (2) 公私立高等学校連絡会議について

6 会議の要旨

司会が開会を宣し、新田知事の挨拶後、会議に出席する学識経験者及び有識者を紹介した。その後、富山県総合教育会議運営要領第3条並びに知事の指名に基づき、以後の議事については南里経営管理部長が進行した。

(1) 県立高校における教育振興について

(南里経営管理部長)

- ・事務局から資料1～5について説明する。
丸田県立高校改革推進課長が、資料1「これまでの検討経過、総合教育会議における検討項目」、資料2「学科・コースについて」、資料3「各学科の配置状況」、資料4「教育課程について」、資料5「一括募集について」を説明した。

(南里経営管理部長)

- ・教育行政学をご専門とされ全国の高校制度改革の状況などに精通しておられる青木教授から、学科改編等の全国的な状況などについてお話をいただく。

(青木教授)

- ・高校生は少なくとも74単位を修得することで卒業が認められる。そのうち36単位は、現在制度上いくつかの条件が必要であるが、所属する学校以外の学びによって卒業の単位に加算算入することができる卒業要件の自由化が進んでいる。また、横の連携として、所属学校ではない遠隔教育を活用した高校間連携なども進んでおり、全日制・定時制・通信制の枠を超えた高校が設置されている動きも全国にはある。また、縦の連携として、高校、高等教育機関、或いは専門学校との連携も進んでいる。これらも国の議論では検討されているが、今回は限られた時間であるため、いわゆる既存の高校教育のモデルの枠内での報告とする。
- ・まず、2010年代以降の高校教育や高校教育政策についてお話し、普通科改革を中心とした学科・コースの多様化についてお話を進めていきたい。
- ・まず、高校教育の動向と課題は3つぐらいにまとめられる。1点目は少子化。これは、昨年度の富山県の高校関係の会議でも話題になったが、15歳人口がここ15年の間に3割減と激減することがすでに出生数からわかっているため、高校の統廃合がまず政策課題になっている。これは、高校教育を提供する場の確保をどうするのかという問題。2点目は高校の無償化。私立高校の無償化もすでに拡充されている。都道府県によっては所得制限も緩和されていることもあり、私立への進学者数が増えている。それを踏まえて、公立高校の魅力向上が極めて必要とされている状況。3点目は高校の進学率が上昇し、事実上、義務教育化。通信制を含めると約99%が進学している。そのため、問題として、高校生が多様化しており、国の議論では生徒を主語にした高校教育が求められている。多様な生徒を卒業させることで、高校教育の質の確保をどうするかは極めて問題となっている。資料に参考と記載している「カレッジ・アンド・キャリア・レディ」は、アメリカの高校教育の考え方。高校卒業後すぐにカレッジに進学する生徒もいれば、キャリア（就職）を選ぶ生徒もいる。いずれにしても、社会に出る、大学に入学する際に、一生学び続け自らのキャリアを切り開いていく力を少なくとも身に付けて、送り出すことが高校には求められていく。同じような問題意識から国としても、高校教育の質の確保が今議論されている。
- ・現在、1700ほどの日本の自治体の中で、公立の高等学校が全くないゼロの自治体

- や1校しかない自治体は1108自治体ある。高校教育をどのような形で提供するのか、通学のことを考えても、現在、急速に環境が変わってきている。
- ・また、少子化ではあるが大学進学率が上昇している。普通科への志向が強いことが観察される。普通科が全国的には生徒数ベースで7割を超えている状況。富山県では、職業系の割合が全国と比べるとやや高いが、それでも6割を超えているため、普通科志向が全国的にも富山県としても指摘できる。
 - ・現在、国では、普通科改革を高校教育改革の目玉として位置づけている。普通科が職業系学科と比べて特色がないことがこれまでであったが、多様化した生徒への対応が求められている。
 - ・また、受験対策として高2の段階で文系・理系に分かれて、いわば、ボリュームゾーンとして私立文系学部への進学を希望する学生生徒が多いこともあり、国益の観点から理系に進学をする生徒をどう確保するかという問題意識に繋がってくる。また理系を志願する女子の割合の低さについても現在議論されている。
 - ・他方で、受け皿となる高校卒業者の半分以上が、大学進学するが、総合型、いわゆるA0入試や推薦入試といった形のペーパーテストではない入試が広がっているが、それとマッチした高校教育が必ずしも提供されていないことへの問題意識もある。さらに敷衍すると、知的基盤社会を担う人材、例えばAIに負けない人材をどう高校が提供するのが問題になっている。
 - ・現在、探究学習が高校及び小中でも制度化されている。座学で先生が一方通行で教える学び方ではなく、自ら課題を発見し生徒同士が議論し協力しながら解を見つけ出す、多様な主体と触れ合いながら解を見つけ出すことが探究であり、国や全国で進んでいる。探究については様々な批判があるが、高校生の学びに具体的にメリットがあるのではないかとすることを強調したい。先生のアンケート調査の結果より、探究を学んでいる生徒は、総合型選抜等での入学者選抜にメリットがあるのではないかと指摘されている。探究は、進学を希望する中位層の高校にかなり訴求するメリットがあることが推測される。
 - ・他方で、高校改革を通じて、地方創生につなげていく動きがある。離島僻地等への国内留学や地域資源を活用した高校教育があり、ここから探究も大事だが、コーディネーターを高校に配置することによって、地域資源と高校教育が結びつくことのメリットがわかってきた。そこで高校教育が普通科改革に繋がっていく。新しいタイプの普通科は2022年度から制度上認められるようになり、探究学習とコーディネーターの配置を軸とし、コーディネーター人件費を賄える500万円ほどが国の補助事業として積極的に進められている。
 - ・補足的に専門学科と総合学科について、専門学科は富山県にもあるが、もともと多様な学科が包括されているので、設置の目的を再検証する必要がある。また、大学進学を必ずしも希望しない中学卒業生の受け皿として事実上機能してきた面があるが、先ほどカレッジ・アンド・キャリア・レディと申し上げた通り、大学進学する専門学科も増えているので、中身や進路のあり方についても再検討が必要。より実践的な職業教育も求められている。具体的な事例としては、岩手県で複数の学科を包括した専門高校や普通科との併置校の事例がある。

- ・総合学科は、普通科ベースと職業学科ベースで、多様な設置背景があることで進路やカリキュラムの中身は変わるので、集計ベースでは多様な進路となっている。富山県なりの総合学科の設置の背景にさかのぼり、今後も将来的な構想を検討されるとよろしいかと思う。
- ・高校改革の最前線では、DXハイスクールという文理横断・探究型でデジタル人材を育てていく1校1,000万円規模の補助事業が始まっており、普通科も普通科以外も支援対象となっている。こういう動向を踏まえながら、県としての議論を進めていただければと思う。
- ・高校教育は義務教育と違い、かなり県として判断ができる領域である。県として、県立高校が担う役割を再定義いただき、それに見合う財政支出をしていく、或いは自県の産業政策と融合した高校教育のあり方をご検討いただければよろしいと思う。

(南里経営管理部長)

- ・青木先生にご質問などございましたらお願いしたい。

○委員からの意見

(牧田委員)

- ・高校進学率が99%という時代の中で、現状高校入試の主流はペーパーテスト。点数だけで入学の可否を左右してしまう。普通科等々の改革を進めるにあたり、高校入試のあり方を変える方向はどのようにお考えか。

(青木教授)

- ・高校入試のあり方も、今、国としても検討の対象になっている。牧田委員のご指摘の通り、ペーパーテスト主体の試験が高校入試では多い。ただ、例えば不登校を中学校のころに経験していた子向けの特別枠も自治体によっては高校入試の特別枠を設けている、或いは推薦、内申書の記述もかなり簡素化されるようになっていくところがあるなど、いわば自由化、緩和されているので、その方向が今後とも全国的に進むと考えている。
- ・中学校で必ずしも普通の学びを経て高校入試に臨む子ばかりではない状況があり、高校入試のあり方も今後変わってくるかと思う。それと連動して、高校に入ってから教育の中身もまた変わっていくのではないかと考えている。

(牧田委員)

- ・新たな高校入試に対応するために、高校側が準備をしなければならないことが新たに増えてくると思う。私は第12回中教審の高校ワーキンググループメンバーで、その時にスクールポリシーが大々的に出てきたが、いかんせん、掛け声だけが先行していて、本当に実のあるスクールポリシーにはなっていないような気がする。今後の動きとして必要なことを教えていただきたい。

(青木教授)

- ・ 委員がおっしゃるように、全国でポリシーへの対応が進んでいるが、まず革袋ができた段階ではないかと思う。入試の負担は高校の教育現場で非常に問題になっている。いきなり入試がガラガラとこれまでの形が全部表から裏に変わるものではないと思うので、まず激変はしないだろうと考えられる。少しずつ微調整をしながら、多様なタイプの高校入試が広がり、それに対応しながら高校教育の中身も少しずつ変わっていくと思う。例えば、探究の単位数はそれほど多くなく、少しずつ様子を見ながら進めていく。ただ、そうは言っても、探究に力を入れる方法は、国の補助の対象になりやすいという現実的な背景もある。

(黒田委員)

- ・ 新しい普通科については実現しようとする、ある程度の規模感が必要ではないか。クラス数や生徒数も重要になってくると思うが、国ではどのような規模感の学校を想定しているのか。

(青木教授)

- ・ 必ずしも、例えば学年に6学級ないと新しいタイプの普通科がスタートできないという議論はない。私としても、何か最低基準が必要と考えてない。例えば、高校をオンラインで結びごく小規模の高校も巻き込んで探究の授業を展開している事例もあり、必ずしも一定の基準を切って普通科改革を進める必要はない。
- ・ オンラインになるほど、コーディネーター的な機能が必要。それをティーチングのプロである先生に任せるのではなく、コストをかけてでも外部の人材や団体のリソースを使うのがよい。

(村上委員)

- ・ 2022年度から新しい普通科や探究も随分深化している。生徒たちにとって非常に大切なことだと思うが、一方で提供する側もとても苦勞を伴うものかと思う。国として教育を提供する側への支援は充実してきているのか。

(青木教授)

- ・ 国として、探究の導入によって教職員の定員定数の加配は行われていないが、高校教育の改革を進める際にコーディネーター人件費が賄えるような補助事業が進んでいる。高校の教員が探究を実際担うが、それを縁の下の力持ちで支えるコーディネーター人材を雇用するプログラムが広がっており、国からの支援は進んでいるとお答えできる。
- ・ 探究をどうデザインするかという意味では、教員研修という観点からは筑波の教職員支援機構での研修の充実が図られている。

(南里経営管理部長)

- ・ 青木教授におかれては、ここでご退席となる。

[青木教授は退室]

(南里経営管理部長)

- ・ 続いて、地域の人材育成に積極的に関与いただいている企業の代表として、杉野副社長に本県県立学校の目指す姿についてお話いただく。

(杉野氏)

- ・ 最近、いろいろと教育関係のことに関わらせていただいているが、もちろん教育のプロでもなければ、今まで教育の世界で生きてきた人間でもないのだから、本日この場でお話しさせていただけることは、そうではない視点で言うべきであろうと思っている。話す前には荒唐無稽な話になってしまうかとも思っていたが、青木先生のお話を聞いていると、そこまで私の話も外れていないのかなと思った。ただ、そうは言っても、教育の現場を知らない人間の意見であることはお含みおきいただければと思っている。
- ・ 高校教育において、疑問に思っていることが幾つかある。まず1つ目は、高校とは何をすべき場なのか。高校の3年間で一体我々は子どもたちに何を身につけて欲しいのか。また、学校にたくさんの人が集まることに何の意味があるのか、集まらなくともできることまでそこでやっているのではないかと、という疑問も持っている。また、受験科目、いわゆる5教科の勉強は、学校で集合してやらないといけないのか。また15年間で30%の生徒減少が確実という中で、各自治体に1校を堅持する必要があるのか、そもそもできるのか。それを維持すること自体が、富山県の教育の弱体化、或いは生徒の教育機会の不平等を招くと思っている。集約することこそが、逆にプラスとなるという考え方もないのだろうかということ。本日、いろいろ考えてきた案なり、提案なりをさせていただければと思う。
- ・ 高校のあるべき姿についてだが、高校は5教科の受験科目を勉強することももちろん重要だが、それよりも社会を知る場であって欲しい。社会を知るとはいろいろな意味があるが、世の中とはどういうふうになり立っているのか、誰が何をして社会が成り立っているのかを知ってもらいたい。もう1つは、人間関係を育むこと。いろいろなジャンル、いろいろなバックグラウンドを持った人たちが集まっているのが社会であり、自分の価値観と同じ或いは自分と同じレベルの人とばかり接することではないという意味において、学校を集約することがむしろ多様性を身につけることに繋がるのではないかと。また、いろいろな将来ビジョン、バックグラウンド、能力を持っている同年代の人間や大人と接する。或いは勉強においても、いろいろな能力を持つ人がまざって学び、様々な物事に触れて感じて視野を広げ、自分の意思で将来を選択することに繋がる場であって欲しい。押し付けるのではなくて、あくまで機会を提供する場であって欲しい。これが私の思う高校のあるべき姿だ。
- ・ では、そこでどのように学ぶか。受験科目5教科の勉強はすべてWebでもいいのではないかと。レベルに応じて、例えば自宅や近隣の公民館、旧の学校でもどこでも集まれるところがあればそこに集まれる人が集まり、或いはオンデマンドでも

いいと思っている。通学はしないで勉強することもあり得るのではないか。仕事でいうとテレワークと同じイメージだが、私は少なくとも座学でやる勉強は集まってやる必要はないと思っている。登校は現状の課外授業のようなイメージでいる。まず、社会の基礎単位である、或いは縮図といえる人間関係、同級生と人間関係を築くことをまずやっていく。プラス課題活動によって、社会にはどのような仕事があり、どういう人たちが何をして世の中が成り立っているのかを体感してもらおう。ただ単に仕事を見せたり、人と会わせたりするだけではなく、仕事一つ一つをしている方々が誇りを持ち使命感を持ってやっていることを知ってもらいたい。

- ・ 私は仕事に貴賤はない、すべて尊いという考え方を持っている。仕事というものは、すべて絶対誰かに必要とされているから存在していると思っている。そうであれば、すべての仕事は誇り高いものであり、そこに上下の差はないことを高校生には知ってもらいたい。ともすれば、華やかな職業や給料の高い職業が偉いと思ってしまいがちかと思うが、そうではない。世の中には、本当にいろいろな能力のある人たちが、自分たちの能力を活かしていろいろな仕事をしていて皆それに誇りを持っている。そこに上下貴賤はないことを一番知ってもらいたい。その中で、例えば大企業は中堅・中小企業よりも上位であるとか、都市部は地方にまさるであるとか、もっと言えば、普通科高校は専門高校よりすぐれているというような誤った階層認識のようなものを払拭していきたい。
- ・ 登校の頻度は、例えば週に木金だけや月に後半の週だけ、合宿形式でもいいと思う。それ以外の期間は、自宅なり近隣の施設にて Web で勉強する。集まって行う勉強は毎日である必要はないと思っている。また集まる場所も、私の考えの中ではあくまで学校は統合するイメージで、例えば新川地区に1校や富山県東部に1校、或いは富山県に1校でもいいぐらいだと思っている。それぐらい集約してもいいのではないか。
- ・ 学科について。私は普通科に行かれる方は、まだやりたいことが見つかっていないことも多いのではないかと思っている。そこでただ漫然と座学中心の勉強だけをさせるのではなく、将来を考えるために社会を知ることこそ時間を取ってもらいたい。そういう意味では、総合学科や総合選択制高校というものが作られるのであれば、普通科は今後必要ないと思っている。職業科は、やりたいことが思い描けている生徒さんが行く場であると考えれば、もちろん専門性を高めるカリキュラムが必要だが、逆にその選択で本当によかったのかを見つめ直す機会を与えて欲しい。必要に応じてやり直せる仕組みも必要だと思っている。15歳の段階で、将来をすべて見通すことはまず不可能。そもそも世の中のことをよく知った上で選択したわけではないと思うので、その選択から離れられないというのは、非常に酷だと思う。いろいろな人たちが混ざりいろいろな価値観の中で、新たな自分のやりたいことが見つかる可能性があると思う。そのときにやり直せる仕組みは必ず必要だと思う。
- ・ 私の主観だが、普通科の中、或いは職業科に行った方の中にも、普通科に行けないから職業系に行くということを思っている人がいる。または親御さんや社会の

暗黙の認識としてそのようなイメージを持っている人がいるのではないかと思っているが、本当に、間違っても普通科に行けないから職業系に行くということがないようにしなければいけない。そのためには、特に職業系の学校に行っておられる生徒さんも先生も、自分たちのやっていることに自信を持っていただきたい。卒業生たちがどれだけ誇りを持って仕事をしているか、どれだけ社会の役に立っているか、社会に必要とされているかを知ってもらいたい。それには根本的な改革が必要だが、細かな施策としては、コースの名前を変える、作業服をもっと明るくするなどの見てくれや、ミーハー的な対策でも意外と変わる部分もあるのではないかと思っている。

- ・次に、単位の互換を考えている。先ほど学校集約はしたほうが良いと申し上げた。もちろん全県1校となったら、この話は必要ないかもしれないが、現実的にはそこまでいかないとしたら、学校間、学科間で単位を補完できるようにしていただきたい。これは専門性に固執しないようにという意味も含める。先ほどの職業系に進学した方のやり直しの解決策の1つにもなる。結局、いろいろな科目でいろいろなものを学んでもらいたいということ。もちろん、コアとなる必須単位もあると思うが、それ以外のところは幅広く選択し、その中で自分の将来を見据える場を提供したい。そのためには、学校間や学科間の単位互換を積極的にやっていただきたい。それによって、途中からの進路変更も可能になると考えている。
- ・次に通学については、高校を集約すればするほど、非常に場所が遠くなることになる。これについて、私はバスを出すことが一番の単純な解決策だと思っている。各自治体に高校を集約し維持していく費用に比べれば、バスをたまに出す、或いは合宿をすることのコストはおそらく安価になると考えている。
- ・次に入試について。私は入試は正直おかしなシステムだと思うこともある反面、人生である年代の若者たちがあれだけ長い期間、1つの目標に対して集中する経験が果たして無駄かという、私は正直無駄ではないとも思っている。試験の中身自体が有効とは思わないが、長年の努力が1つの目標に結実すること、またそこで経験するすごく大きなプレッシャーは非常に得難いのではないか。ただし、1発勝負のテストは余りにも酷であり、余りにもその人の実力を見るのには不適切であると思うので、例えば県内中学においては、定期的に入試相当の試験を複数回行ってその合算で決めるなどをすれば、次のステップに進むための関門に対して努力することや、プレッシャーを感じることを経験しつつ、1発アウトという不合理も避けられると思っている。また、県外からの受験者においては、これはやむを得ないので、現状同様の1発勝負になるのかもしれないが、もしここも他県と互換できるような仕組みがあれば、例えば同じような複数回の試験を行うなどの県がもし出てくるのであれば、そこでの互換も考えられると思っている。
- ・高校の教育は人口減対策にも関係してくると思っている。よくキャリア志向の女性の方が都市部に流出する理由として聞かれる、富山には受け皿がないからという話だが、確かに私は富山県にはキャリア志向の女性の方が満足できる職の絶対数は少ない、足りないのではないかと思っているが、他方高校を卒業して大学に行く前の段階で彼女らが富山県にどのような仕事や企業があり、どのような取り

組みをしているかを知っているか。企業側も十分に見せることができているかという甚だ疑問に思っている。そういう状態なのに、富山に受け皿がないと決めつけられて、外に出ていってしまっている、戻ってこないのは非常に残念なことだ。

- ・また、女性は文系が多いというイメージや理系の女性であっても例えば機械や土木は向かないというイメージは、少なからず社会全体にあるのではないか。例えば、私も自分の娘が理系であったとして、理系の仕事に就きたい、学科に行きたいということがあったとき、例えば私の会社である機械工学や土木を希望すると言ってきたら、えっと感じてしまうのではないかと思っている。それぐらい刷り込まれてしまっているのではないか。何となく女性で理系であれば、化学、医学、IT系などではないのかと思ってしまう固定観念を崩さないとその後の人口減社会における人材の確保には対応できないのではないか。我々の暗黙の認識を変えるためにも、高校時代に社会の多様性を体感してもらおう。いろいろなことをいろいろな人がやっていることを知ってもらいたいということに繋がってくる。少なくとも高校時代から、できればもっと前の中学、小学校のころから、日常的に社会や県内の仕事を知ってもらう機会を提供することが富山県の少子化人口減の対策になると考えている。大学生とか就職活動の時期になってからでは、もうすでに彼ら彼女らは都市部なりどこなりで生活ができ上がってしまっているもので、それからでは遅い。是非とも高校の前の段階から、少なくとも高校の段階からそういうことをやっていただきたい。また企業側も高校生と接することで、意見やニーズをじかに聞くことができると思う。特に女性の県外に出ていきたいと思っている方から、富山県の企業には何が足りないか、どうしたら富山県の企業に勤めようと思うかを企業の人間も直接聞くことがなかなかない。そういう機会を、高校教育の中に組み込んでいただければと思う。
- ・いろいろ理想的なことを申し上げた。特に仕事に貴賤がないということを行ったが、実際収入や待遇に差があるのもまた事実だと思っている。これは本当に綺麗ごとではなく、企業はそこを変える決意と行動が必要だと企業側の人間としては思っている。総論賛成各論反対にならないように、自分の会社ではそれはやりませんということがないように、企業としても今後人口が減っていく中で、自分たちも生き残っていくためにも覚悟を決めて行動する必要があると思っている。また、教育、行政、地域、企業がバラバラに対策するのではなくて一体となって取り組まないと、固定化された社会の認識、固定観念はなかなか打破できない。それぞれがいろいろな取り組みをしているが、それが一体となっているのかということなかなかできていないと思うのでそこを取りまとめていく必要がある。
- ・この後15年で30%高校生が減っていくことが確実視されている、その先もっと減ることもしばらくは確定している中で、今までと同じやり方をベースに論じている場合ではないと思っている。かなり切迫した状態だと思っている。いろいろな教育のやり方を変えるという話をすると、どうしても今までを否定しているような意味にとられてしまうが、私はそういう意味で言っているのではない。ただ、あれもこれもしたい、これまでやっていたことだからやらないといけなと言っ

ている場合ではないと思っている。ある程度選択しないといけない、犠牲にしないといけない部分もあるのだと思う。そこは切り離して、これからの人口が減った中でどうやって機能していく仕組みがつかれるのかに軸足を置くべきだろう。しかもそれが、これから生きていく子どもたちのために本当になっているのかという視点が非常に重要だと思う。

- ・ 例えば Web で授業という話をすると、当社のテレワークでも一緒だが、集まらないとできないとか、集まることのメリットという話が必ず出てくる。それはもちろんあるが、選択をしないといけない。諦めるべきところもあるというところと、感覚の問題だと思っている。これから生きていく方々はデジタル・ネイティブ。このデジタル・ネイティブと我々のような集合で生きてきた人間とは、感覚が違わず。やってみないとわからないので無責任なことは言えないが、もしかしたら、今の中学生や小学生だったら、高校生になったときに1回も集合の座学の授業を受けなくてもクラスメートとしてやれるかもしれない。人間関係をつくれるのかもしれない。つくれないと決めつけてしまうのは、集合で生きてきた我々の感覚でしかない。そういう意味でも、我々の感覚を押し付けるのではなく、これから生きていく人間のセンスや感覚はどういうものなのかを踏まえて、高校の今後のあるべき姿を見つけていきたい、いかないといけない。

(南里経営管理部長)

- ・ 委員の皆様より、杉野様にご質問などございましたらお願いしたい。

○委員からの意見

(牧田委員)

- ・ 仕事に貴賤がないというところはまさにその通り。仕事に貴賤などあるわけがなく、先ほど杉野さんがおっしゃったように、世の中にその仕事が存在しているのは存在するだけの価値があるから存在できているわけでそこに貴賤などない。
- ・ ただ、存在できる仕事の価値を超えた、いわゆる付加価値を生み出せるかどうかは大変大きなポイントだと思っている。例えば、杉野さんの会社では水でモノを切ったりされる。これはものすごい付加価値だと思う。今まではノコギリなどでごしごしやっていたものが、高圧の水で切ると跡も残らず綺麗に切断できる。これを考えて実践するというのが企業における付加価値だし、お勤めになっている社員さんの付加価値なのだろうと思う。まさに教育というのは、付加価値を生み出せる人材をいかに輩出するかということが大切であり、生み出す付加価値によって企業収益に差があるような気がする。確かに仕事に貴賤はないが、付加価値の出し方によっては、ある意味格差が生じることをある程度踏まえて、我々は教育を考えていかなければならないとお話を聞いていて思った。

(黒田委員)

- ・ 学校が人間関係を作っていく場だとすれば、それをオンラインでできるのだろうか。デジタル・ネイティブだからできる可能性もあるという話だったが、そこで

の学校の意味合いみたいなところ、果たしてオンラインだけでいいのか。高校生はオンラインでできるとすれば、小学校、中学校においてリアルで人間関係をつくってきた経験がベースにあればできるのかなと思う。これはリアルで生きてきた人間的な発想かもしれないが、どの程度まで考えていращやるのかももう少しお聞きしたい。

- ・子どもたちの高校選択で選択する1つに部活動がある。部活動も今は大分やり方が変わってきて、地域移行をするところも出てきている。学校の中での部活動の意味はあるとは思う。高校野球も始まったが、今年も富山県でも複数校でチームを編成しているところもあるようだ。こういった中で人間関係はどういう形で作っていくか、そこでのリアルとバーチャルはどういうふうと考えていけばいいのか、子どもたちはデジタル・ネイティブだからという形で割り切れるのかが気になった。もう少しそのあたりをお聞かせいただきたい。

(杉野氏)

- ・先ほどの貴賤の話を誤解のないように申し上げると、収入が多いから少ないからというところがまず貴賤のギャップだと思っている。収入が高いことに価値があるわけではない、付加価値が多いことに価値があるわけではないということを私は申し上げたかった。
- ・今ほどのご質問については、極論して5教科はWebだけでいいと言ったが、集まってやることもあるかもしれない。それは選択できる話だと思う。5教科以外の活動は、基本的に集まってやるものが多いと思っているので、対面としての人間関係はそこで作る機会は十分あると思っている。
- ・部活は、選択の部分ではないか。あれもやりたいこれもやりたいと言っていくと、15年で30%減るといふときに本当に対処できるのかということになる。部活を切り捨てていいといきなり言わないが、諦めざるをえないものもあるのではないか。
- ・必ずしも部活的な活動は学校でしかできないものではないと思う。地域にもそういうものもあるし、いろいろなスクールなどもあるので、それを学校がどうしてもやる必要はないのではないか。世界的にみても、必ずどの国も同じような部活の仕組みがあるわけでもない。部活がなくなったら、高校教育が成り立たないかというところというわけではないと思う。部活をなくせと言っているわけではないが、本当にコアとなる、やらないといけないことから順番に埋めていき、足りなくなったところは、もうしょうがないと諦める判断をする必要があるのではないか。

(坪池委員)

- ・まさにその通りだなという提言で本当にありがたく思っている。
- ・自宅でオンライン学習をすることについては、高校でいうと通信制になってくる。今後、通信制を充実する、或いは新たな通信制を作っていくとか、或いは全日制の中で通信制の何かを取り入れていくという方向になっていくのではないかと思

う。基本的な私の考え方には、今、多く存在している不登校の生徒たちに柔軟に学ぶ場が必要だということからだが、杉野さんは、学校で必ずしも集まらなくてもいいという考え方の根本的発想の原点はどういうところにあるのかお聞きしたい。

(杉野氏)

- ・ 私は大学院で海外へ行っていた時期がある。私もずっと日本の教育を受けてきて、大学卒業まで日本にいて初めて海外の大学院に行ったときに衝撃を受けた。ほとんど座学がない。もちろん大学院だったから、ビジネス系のところだったからということもあるのかもしれないが、そこでは基本的に大量の宿題を下宿でこなし、学校はそれをベースに議論をする場だった。そこで初めて、自力でインプットをして自分の頭の中で咀嚼・解釈・応用し、そこから発言することの価値を知った。日本に帰ってきて、なぜ聞けばわかる話、読めばわかる話をわざわざ学校に来てこれだけたくさんの人たちが集まって、座って聞いていたのだろうと本当に疑問に思った。集まってもいいと思う。しかし集まるならば、リアルで集まっていることの価値を生かして、例えば議論をするなどしたらいいのに、黙って座っているだけだったら本当にいらぬのではないか。
- ・ 私は学校で講演会や講義をさせていただくことがあるが、基本的には例えば2時間いただいたら40分か30分ぐらいしか話さない。あとはずっと質疑応答をしている。私の話を聞くだけだったら、ビデオを撮っておいて後で見てくださいでいい。わざわざみんな集まる必要がない。せつかくみんな集まっているのだから、皆さん質問してください、質問に対して思ったことをまた質問してください、そのやりとりの中で理解を深めてください、自分で考えてみてくださいと言っている。学校はそういう場なのではないかと思っている。故に極論すると、座学的なものについては全部 Web でいいのではないかと。

(坪池委員)

- ・ 対面をさらに充実させていくということか。

(杉野氏)

- ・ そのとおり。対面を否定しているのではなく、対面は対面でしかできないことをやってもらいたいということ。

(大西委員)

- ・ 今、坪池委員が言われたことに重なるところもあると思うが、共感できる場所が多く、高校2年生の私の息子が全く同じことを言っている。インプットだけの授業は本当に意味がないと実感していると言っている。学校にいと、学校でしかできないことがたくさんあるので、そのような活動については楽しい、やりがいがあるとも言っている。
- ・ 集まることにも、意味が大きくあるのだろう。特に、探究の授業や課題研究につ

いては、オンラインでは感じられない空気感とか、友達との意見の微妙な齟齬やこの人は共感してくれるなどを、まだ未成熟、未発達な高校生としては、集まってやる方法が楽しいのだろうなと感じている。しかし、学び方についてはすごく工夫していかなければいけないということは、非常に共感し参考になった。

- ・ キャリア志向の女性が都市部に流出するのは富山に受け皿がない、という声をよく聞くのは県民の皆さんの認識としてあるようだ。例えば、関東関西の有名な大学に進学する女子がいて、私の実家でも、その子は富山に帰ってきて仕事があるの、という感情を持つようだ。確かにそんな大学に行って、どんなところに就職されるのだろうと思ったりもするときに、富山でもぜひそういうところがあるといいと思うと同時に、他にも仕事でなくても生きていく人生の中で富山に行って生活をして、すごく幸せだとかよかったとか充実することが高校生活にあればいいと思う。仕事の面以外からも、また女性に限らず、男性も同じように高校生活において富山の魅力などを学ぶことができたらと感じた。

(杉野氏)

- ・ 仕事人間なもので、仕事のことばかり言ってしまった。確かにおっしゃる通り、本当に総合的な価値観、富山の価値を知ってもらう機会は重要。

(大西委員)

- ・ 私も一度東京や他の県で働いたり、家庭を持ったりした経験があり、富山に戻ってきた人間なので、特にそのように思った。

(村上委員)

- ・ 極論というふうにおっしゃったように、今はいろいろな子どもたちがいるので、幅広く対応していく上で、非常に参考になるものだと思っている。
- ・ Web を中心にしてやっているN高などに救われている子どもたちも多数おり、一方で、杉野委員は対面ですることの充実が非常に大切であるということもおっしゃられたと思う。
- ・ 小さな子どもたちも大勢で群れることによって、いろいろな切磋琢磨に繋がり、いろいろな人間関係を学び、徐々にそれから成長して高校生になる。高校生になっても、そういう点というのは、社会でこの後生きていく上での大きな力を育む場所になると思うので、おっしゃられたように、いろいろなフィールド、顔と顔を突き合わせてやる面での時間を大切にして、その辺を充実させていかなければいけないと感じた。社会を知る場であって欲しいとのことだが、今の高校教育に決定的に欠けていることなど教えていただけたらと思う。

(杉野氏)

- ・ 私の子どもはまだ小学生なので、今の高校教育がどのようになっているかは、正直そこまで知らない中で私自身もイメージで語っているところがあるのだが、私が高校生のときは、本当に高校はひたすら5教科を勉強する場所だった。しかも、

インプットの場であった。そこでは社会を知る経験もなければ、自分から発信する経験もなかった。自分で考えることもほとんどなかったのではないかと思う。そのあとの大学院や社会人になってからの自分と比べると、極めて受け身であった。世の中のことをどれだけ知っていたのかというと本当に知らなかった。それがよかったか悪かったかという、私は良くなかったと思う。

- ・ もう1つは、これも非常に言い方が難しいのだが、高校は受験勉強があつて入った学校であればそれなりに同じようなタイプの人が多いが、社会に出てみて仕事をすると、本当にいろいろなタイプの方がおられる、いろいろなレベルの方がおられ、いろいろなバックグラウンドのある方がおられるのに、高校や大学で非常にソーティングされた世界で生きてきてしまっていた自分がすごく生き物として弱いと思った。世の中にはいろいろな価値観があり、いろいろな人がいて1つのものを形成していることを若いときに知るとはすごく価値があると私は思っている、あまりソーティングしないほうが良いと思っている。もちろん、全てをまとめてしまうと効果的に勉強ができない面もあるので、学科や単位で少し分けては行くが、そうでない部分はできるだけ混ぜて欲しい。とにかくいろいろな人といろいろな価値観と混ぜて欲しいという思いでお話した。

(南里経営管理部長)

- ・ 杉野氏におかれては、ここでご退席となる。
[杉野氏は退室]

(南里経営管理部長)

- ・ 続いて、事務局から学科見直しの方向性及び具体案について、資料6～10について説明する。

丸田県立高校改革推進課長が、資料6「学科別卒業生の進路」、資料7「学科別志願状況及び欠員状況の推移」、資料8「県立高校のあり方に関するアンケート調査結果」、資料9「地域の教育を考えるワークショップ(学科・コースについての主なご意見)」、資料10「学科・コース見直し(案)」について説明した。

(南里経営管理部長)

- ・ 委員の皆様からご発言いただきたい。

○委員からの意見

(牧田委員)

- ・ まず工業科について、もちろん一括募集はいいと思うが、それぞれのコースで本当に学びたい子どもたちがそこへいくことができなければならない。でも、杉野さんの話にもあったが、結局、普通科の受け皿としての職業科という位置付けが変わらない限りは、幾ら工業科の中身を変えても入ってくる子どもたちがそれにアダプトできなければ意味がない。ついては、工業科を新たに改変していく上で、入試について何か工夫をするのかをお聞きしたい。

- ・ 農業科については、青木先生から設置目的等をこれから検討しなければいけないというご提言をいただいたと思う。農業科は基本的には農業に従事することが目的なのだろうと思うが、現状、農業科へ進学し専業農家になっている子どもたちがどれだけいるのか、またはどういったところに進学や就職しているのか、農協に何人入っているのかなどを正しく現状を把握した上での農業科の改革なのかをお伺いしたい。

(事務局)

- ・ 工業科に入った後、どういったコースに分かれて本当に学びたいことをどう学んでいくかについては、いろいろワークショップなどでもなかなか中学校時点では選択が難しいとのご意見をいただいている。今後の県立高校のあり方を検討していく中では、工業科のあり方についても考えていく必要があるということで、今ほどの委員のご意見も踏まえながら、長期的にはそうしたことにどう対応していくのかの考えが必要であろうと思っている。一方、本日お示しした砺波工業、魚津工業の学びの改革は、今できることをまずはやっていきたいということもあり、こちらは短期的に取り組んでいきたい。社会のニーズも踏まえながら、できるだけよりよい学びを提供したいという観点から方向等も検討している。長期、短期を分けて検討していきたいと考えている。その中でご質問いただいた入試制度については、長期の検討が必要ではないかと考えている。
- ・ 農業科の進路については、本日資料 8 ページの卒業生の進路で、普通系学科と職業系学科のそれぞれの進路状況などの記載があり、令和 4 年と平成 26 年の比較をしている。いずれの学科においても就職の割合が減り進学が増えている。農業科は令和 4 年 3 月の卒業では就職が 51.9%、進学は大学、短大が 15%、専修学校が 33.1%という数字は今お答えできるもの。

(牧田委員)

- ・ 就職した人や進学した人で、農業関係に進んでおられるお子さんはどれぐらいいるかは把握できているのか。

(事務局)

- ・ 学校ごとに把握はしているが、細かな数字を今は持ち合わせていない。

(牧田委員)

- ・ 例えば中央農業高校でいうと把握はしているか。

(事務局)

- ・ ご認識の通り。

(牧田委員)

- ・ それによって中央農業高校の農業科の存在価値は、ある意味担保できているのか。

(事務局)

- ・ 数については、何をもって大きいと見るか小さいと見るかもあるが、農業科としての役割は十分持っているものという思いと、それから高校を卒業してすぐに就職する生徒さんと、進学等をして或いは違う系統の企業等に就職した後、就農される学生さんもおられると聞いている。

(広島教育長)

- ・ この春に私どもも中央農業高校の現場を見てきた。校長先生、生徒さんといろいろお話をした中で、すべてが農業系に行くという話は事実ではないであろうと思う。校長先生、他の先生方も農業高校の意義として、農業の技術、農業のよさをしっかり伝えられる学校により良くしていきたいという思いを語っておられた。今回の提案は、その1つのツールであろうと思っている。牧田委員が言われるように、今後の将来的な話についてももしっかり議論していくべきものと思うが、今やろうとしていることによって、近い将来の人材をしっかりと確保したいという私どもの思い、高校側の思いもあることをご理解いただければありがたい。工業科の方もご意見をいろいろいただいているものを反映させたいというもの。

(坪池委員)

- ・ まず工業科については、一括募集には2つの利点があると考えている。1つは、入ってから不適應を起こさないということがある。例えば、中学校の理科で電気を学ぶが、それがよくわからないから高校に入って電気を避けるという生徒さんがいる。ところが、工業の授業というのは、体験などを通じて非常に抽象的な概念などをわかりやすくやっている。我々が見ると、びっくりするぐらいの内容だが、そういう授業に接して気持ちの変わる生徒もいるのではないかと思う。
- ・ 一方、前半に幅広く学ぶということだが、これだけ内容が高度化してくると、校内では半年間ももったいない、最初から徹底的に専門教科をやった方がいいのではないかという考えもないではないと思う。しかし、終身雇用でずっと同じ仕事をする前提ではなく、転職や社内で部署が変わることも当然あるという意味では、いろいろなことを学ぶベースを最初に学ぶことは、生涯学ぶ、生涯仕事をやっていく観点からはいいと思う。
- ・ 農業科について、栽培、飼育、活用ということで、何をやるかが具体的にわかるようになったのでこれはいいのではないかと思う。

(黒田委員)

- ・ 名称変更は大学でもよくやるが、名称変更するだけではなかなか難しいところもある。また、名称変更にも結構なコストがかかる。名称変更すること自体は大切だとは思いますが、それよりも中身の部分をどう変えていくかではないか。また、今回工業と農業のところだけを急いでということを出されている。長期のものはこれから検討するというのではあったが、そうではなくて長期の中での最初の取

っかかりとして、この改革にそういう工夫が入っているということであれば理解ができるが、これだけ議論から外れて、この名称がこの先どこまで通用するかもわからない状況で慌ててやる必要はどこまであるのかと疑問に感じている。

- ・ 中央農業の中でも IoT や AI という話が出てきていて、果たしてそれを今いるスタッフですべて賄えるのか。そこをやるためには、例えば工業の先生に手伝ってもらった方がいいのではないか。砺波工業と魚津工業にしても、実験などは難しいと思うが、それぞれないものを講義レベルのところは遠隔を使って指導できる専門性の高い先生方の話が聞け、それぞれで実習をやるなどの工夫を入れていかないと、慌てて令和8年度にやる意味が伝わりにくいのではないかと思う。

(事務局)

- ・ 砺波学区には建設系の学科がないことや、入ってから学ぶ内容を選択したらいいのではないかといった声もワークショップなどでも多数いただいていることを踏まえた。また、学校側としても名前だけということではなく、生徒さんによりよい学びをもっと提供していきたい、中身をもっと良くしていきたいという思いもいただいている中で、まず早めに取りかかれるものは取りかかっていたいという主旨である。これもそういった大きな流れの検討の第一歩ではあると思っている。説明が少し不足していたかと思う。

(大西委員)

- ・ 今ほどの説明の中で、速やかに検討する工業科2校と農業高校の学科・コース見直しについて、社会の変化、産業界のニーズを踏まえて、このような提案が出されたとあったが、コースについては、工業科、農業科共に就職者が少ない学科であり、また進学される生徒さんもおられるので、出口である地元の実際に就職される企業さんの見解や意見、或いは業界や業種の動向、社会情勢なども含めて見解や意見、或いは進学者にとっては大学側の意見なども協議の材料として聞いていただいて意味のある改編をお願いしたい。
- ・ 心配しすぎかもしれないが、今この見直しをした、でも3年後5年後にまた見直しをしなくてはいいけませんということにならない方がよいと思う。

(事務局)

- ・ 各学校のご意見も聞いている。委員もおっしゃられた通りであり、学校側でいろいろ関係のところのご意見も踏まえて、より良い教育の充実を図りたいという観点で、協議をして提案に至ったところ。今後もいろいろなご意見もお聞きしながら、取り組んでいきたい。

(黒田委員)

- ・ あまり小手先で調整ができる段階ではないように思う。今日の議論の中にも出たように、方向性をしっかり見定めて、どういうことをやっていくか。県民の皆さんも含めて、新しい高校はこういう高校になるのだというイメージをみんなに持

っていただくような動きをしていかないといけない。さっき質問で、その規模感を聞いたが、ワークショップの状況などを見ている、富山の皆さんの大規模校のイメージは大きくてせいぜい1学年9クラスぐらいの学校。けれど、全国を見渡してみると、1学年16クラスとか20クラスという高校もあつたりする。部活動も、運動系、文化系、両方とも30種類ぐらいあるところもある。今、県内の高校で聞いていると運動部は4つぐらいとか、文化部も5つぐらいということで非常に寂しい状況もあり、そういうところも子どもたちへの魅力が伝わっていないところにもなっているのではないかと思う。大きな規模感の高校をいくつか作ることも、今後の富山の方向性としてはありだと思っている。そのあたりも含めてご検討いただきたい。

(南里経営管理部長)

- ・ここまでの議論を踏まえて新田知事よりご発言いただきたく。

(新田知事)

- ・皆さんありがとうございます。
- ・2022年の3月に一番最近の高校の再編を行った。大変な議論を行って4つの新しい高校を作り、4つの高校が歴史を閉じた。大変な議論の末であった。そして昨年は、5つの高校の学級を削減することも行った。これも大変な議論の末だった。それらを受け、今回は丁寧にということで、昨年度は高校教育振興検討会議を行い、その報告を受けて、今年度は本総合教育会議でも議論していただいている。また、あわせてスリーラウンドのワークショップを4つの学区で行う。今2ラウンド目まで終わった。これからさらに意見交換会も4つの学区で行う。一方で県議会でも、そのようなヒアリングも重ねておられる。また県議会の6月定例会でも本当に多くの議論になった。
- ・まず、特にニーズが強いもの、スピードが求められているもの、そんなご意見が出たものを今日3つ提案した。実際に進めていく体制はどうか、或いは現状の卒業生のトレースはできているのか、あまり急いでもすぐ時代は変わるのではないかなど様々なご意見もいただいたところ。先ほども説明したように、新しいことを仮に始めるとしても令和8年为目标。逆算すると、今からこういう検討に入らせていただけないかということをお今日提案したが、本当に様々なご意見をいただいたので、これらについてはご指摘された課題点なども踏まえて、次回この場で再度提案をさせていただきたい。あわせて、普通科或いは商業科についても、今後でもできるところからは進めていきたい。
- ・様々なワークショップの中でも、急ぐことは急ぐんだというご意見もある。それを受けとめて、今日提案をさせていただいたが、課題もたくさんあることを皆さんからご指摘いただいたので、これについては引き続き精査をしていきたい。その上での提案とさせていただきたい。
- ・ワークショップなどでも、皆さんからいろいろなご意見をいただく。今日は十分にそれを説明する時間はなかったが、その中でも子どもまんなかということは皆

さん口をそろえておっしゃることであり、僕は共通理解だと思っている。

- ・ただ一方で悩ましいのは、地域と高校の関係。先ほど杉野さんからは、もう1自治体に最低1校ということはもう持たないのではないかというご意見もいただいた。もちろん子どもたちが増えていたときには、或いはこれまでは何とかこどもまんなかと地域性は折り合いをつけながらやってこられたが、今この激しい減り方を前にすると、こどもまんなかをぶれずにやろうとすると、地域との関わりのあたりが大変に悩ましい問題。この辺りも3回目のワークショップ、或いは意見交換会で意見を聞いていきたい。あくまでこどもまんなかをぶれずに、その上で今後のあり方を考えることにしていきたい。先ほど杉野さんから、高校3年間で何を見つけるのかということは根源的な話だと思ってお聞きしていた。もちろん教育大綱があり、そういうことはじっくりと考えているが、最終的に高校3年間で子どもたちに何を身につけてもらうのかを改めて、我々としてもしっかりと受けとめて今後の議論にも臨んでいきたい。

(南里経営管理部長)

- ・ただいまの知事の発言にもあったが、本日のご意見は事務局の方で整理し、次回以降、普通科系学科、商業科その他学科等の議論と合わせて議論を進めさせていただきたい。

(2) 公私立高等学校連絡会議について

(南里経営管理部長)

- ・事務局から資料11について説明する。

〔 水上学術振興課長が、資料11「令和6年度第1回富山県公私立高等学校連絡会議の開催結果」について説明した。 〕

(牧田委員)

- ・この総合教育会議は、教育委員と知事が入って議論をする場だと認識している。とても忙しい知事さんの時間を割いて、この場を作っていただいているが、実際には、我々と知事が議論するというよりは、最初にご挨拶いただいて、我々が言いたいことを言ってそれで知事に総括をいただく形。加えて、今日のように青木先生や杉野さんのお話を伺うのも良いのだが、余りにもそちらの方に時間を取られすぎて、杉野さんが議論することは大事だと言っている先から、ここで議論を充分していない。総合教育会議のあり方を次回からご検討いただきたい。

(新田知事)

- ・おっしゃることはわかる。実際私も他の県の状況を聞いたりすると、あまりこの会議が活用されていない県もあるのは事実。突っ込んだ議論がなかなかできづらいというようなことを思っている知事さんもいるという話は聞いたことはある。

(南里経営管理部長)

- ・ 以上で本日の議事を終了する。

この後、事務局より、閉会の挨拶を行った。次回の第3回総合教育会議は、8月中の開催を予定している。

以上